古典A　date：　年　月　日　自然学園高等学校　梁川キャンパス

学習内容：推察する

おくのほそ道（冒頭）

学籍番号			
氏名			

「おくのほそ道」　松尾芭蕉

月日は注百代の過客にして、①行きかふ年もまた旅人なり。②舟の上に生涯を浮かべ、③馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとす。④古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、注片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋、⑤江上の破屋に☆蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮れ、⑥春立てる霞の空に、白河の関越え⑦むと、注そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、⑧股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、⑨松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲りて、注杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

注面八句を★庵の柱に懸け置く。

【注釈】

百代の過客　李白の「春夜桃李の園に宴するの序」の冒頭の一節の引用。

夫天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客。

夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。

そもそも天地はあらゆるものの旅宿のようなもので、月日は永遠の旅人のようなものである。

片雲　ちぎれ雲

そぞろ神　人の心に取りついてなんとなく人の心を誘い動かす神。

杉風　杉山杉風。芭蕉の門人。芭蕉の江戸出府と同時に入門し蕉門の基礎をかためるとともに，芭蕉の経済面での庇護者ともなった。

面八句　俳諧連歌百韻を標す懐紙の初折り表の八句（一頁目の八句）

（冒頭）

①行きかふ年　とは

②舟の上に生涯を浮かべ　どんな者だろうか

③馬の口とらへて老いを迎ふる者　どんな者だろうか

④古人　とは芭蕉が敬慕する昔の詩人を指すのだが、誰であろうか。四名あげよ。（この冒頭の部分から、二名は推測できるかも）

⑤江上の破屋　とは「隅田川のほとりのあばら家」であるが、それは何。

⑥春立てる霞　この部分に使われている表現技法とその説明

⑦む　助動詞「む」この場合の意味とは

⑧股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより　とは何をしているのか

⑨松島の月まづ心にかかりて　この部分に使われている表現技法とその説明

どんな月だと思いますか

・句の部分の「季語」「季節」

【考察】筆者芭蕉はこの冒頭で何を表現せんとしたのだろうか。

・なぜ家を譲ってしまったか。・面八句を懸けた意図とは何か。をふまえ考察しよう。

古典A	date：　年　月　日	自然学園高等学校　梁川キャンパス
学習内容： おくのほそ道（平泉）	学籍番号 氏名	

三代の栄耀一睡のうちにして、※大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ、高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても※義臣すぐつてこの城に籠もり、功名一時の草むらとなる。「※国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と笠打ち敷きて、時のうつるまで涙を落としはべりぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に※兼房見ゆる白毛かな　　曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散り失せて、玉の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の草むらとなるべきを、四面新たに囲みて、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

（平泉）

※大門――平泉館（ひらいずみのたち）の南大門
※義臣――忠義の臣＝忠誠を誓う家臣（かしん）（家来（けらい））
※国破れて山河あり、城春にして草青みたり
――杜甫の「春望」の一節（国破山河在　城春草木深）
※兼房――義経の家臣（老齢である）

▽三代の栄耀　とあるが、「三代」とは

藤原清衡　基衡　秀衡

◇その栄耀の痕跡（名残り）二点

・大門の跡が一里ほど手前にある。敷地の広さ。
・金鶏山のみ形を残す。人工山が残っている。

▽高館　とは、

源義経の居館　義経堂（ぎけいどう）　判官館（ほうがんだて）　衣川館（ころもがわのたて）　ともいう。
義経最期の地

▽時のうつるまで涙を落としはべりぬ　とは、どれくらいの時間なのだろう。また、誰を意識しているだろうか。

ある程度長い時間　　西行

▽夏草や兵どもが夢の跡　の句　季語　夏草　季節　夏

義経主従が切り結び奮戦する様子と
現在の雑草が生い茂る様子が二重写しになる

▽既に頽廃空虚の草むらとなるべきを　とは何をひき合いにして述べたものか。　高館

▽五月雨の降り残してや光堂　の句　季語　五月雨　季節　夏

◎この句に込めた感動とは

大門の跡や金鶏山のように「あるにはあるが」のものでなく、当時を偲ぶことのできる実景として残っていたところ。

古典A　date：　年　月　日　自然学園高等学校　梁川キャンパス

学習内容：推察する

おくのほそ道（松島）

学籍番号			
氏名			

松島

日既に午にちかし。船をかりて松島にわたる。其の間二里余り、雄島の磯につく。

そもそもことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭・西湖を恥ず。東南より海を入て、江の中三里、浙江の潮をたゝふ。島々の数を尽して、そばだつものは天を指さし、ふすものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重に畳みて、左にわかれ右につらなる。負へるあり抱けるあり、児孫愛すがごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたはめて、屈曲をのづからためたるがごとし。その気色、よう然として美人の顔を粧ふ。ちはや振神のむかし、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を尽さむ。

雄島が磯は地つづきて海に出でたる島なり。雲居禅師の別室の跡、坐禅石などあり。

はた、松の木陰に世をいとふ人も稀々見えはべりて、落穂・松笠など打ちふりたる草の庵、閑に住みなし、いかなる人とはしられずながら、まずなつかしく立寄るほどに、月海にうつりて、昼のながめまたあらたむ。

江上に帰りて宿を求むれば、窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅寝するこそ、あやしきまで、妙なる心地はせらるれ。

松島や　鶴に身をかれ　ほととぎす　曽良

よはロをとぢて眠らんとしていねられず。旧庵をわかるる時、素堂 松島の詩あり。原安適 松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解きて、こよひの友とす。かつ、杉風・濁子が発句あり。

午 ― 方位でいうと南、つまり時刻では昼の零時

扶桑 ― 中国で日本を指した言葉

▽「雄島が磯」の場面で　草の庵　まずなつかしく　江上に帰り　とあるが何を意識してのものか？

深川の元芭蕉庵（江上の破屋）

▽芭蕉は「松島」では句（発句）を残していない。その理由として挙げられるのが、「あまりに美しかったため、＝筆舌に尽くし難かったため」という見方である。そこで別の捉え方はないか、考えてみよう。

他人が作った詩や句を肴か子守歌か、にして眠れぬ夜の友とするところに、松島の光景に感動できたものがあったのか、私には疑問に思えるのです。ほんとうに感動できる何かがあるならば、何としても、句は残すものだと思うのですが……。

松島

日はすでに南中に近づいたので、船を借りて松島に渡る。二里ほど船で進み、雄島の磯についた。

まあ古くから言われていて今さら言うことでもないのだが、松島は日本一景色のよい所だ。中国で絶景として名高い洞庭・西湖と比べても見劣りがしないだろう。湾内に東南の方角から海が流れ込んでいて、その周囲は三里、中国の浙江を思わせる景色をつくり、潮が満ちている。湾内は沢山の島々があり、そそり立った島は天を指差すようで、臥すものは波にはらばうように見える。あるものは二重に重なり、またあるものは三重にたたみかかり、左にわかれ右につらなっている。小島を背負っているように見える島もあり、前に抱いているようなのもあり、まるで親が子や孫を抱いて可愛がってるようにも見える。松の緑はびっしりと濃く、枝葉は汐風に吹きたはめられて、その屈曲は自然のものでありながら、人が見栄えいように意図的に曲げたように見える。

蘇東坡の詩の中で、西湖の景色を絶世の美人、西施が美しく化粧した様子に例えているが、この松島も深い憂いをたたえ、まさに美人が化粧したさまを思わせる。神代の昔、山の神「大山祇（おおやまずみ）」が作り出したものだろうか。自然の手による芸術品であるこの景色は、誰か筆をふるい言葉をつくしても、うまく語れるものではない。

雄島の磯は陸から地続きで、海に突き出している島である。瑞巌寺中興の祖、雲居禅師の別室の跡や、座禅石などがある。

また、世の喧騒をわずらわしく思い庵を建てて隠遁生活をしている人の姿も松の木陰に何人か見える。落穂や松笠を集めて炊いて食料にしているようなみすぼらしい草の庵の静かな暮らしぶりで、どういう来歴の人かはわからないが、やはり心惹かれるものがあり立ち寄りなどしているうちに、月が海に映って、昼とはまたぜんぜん違う景色となった。

浜辺に帰って宿を借りる。窓を開くと二階作りになっていて、風と雲の中にじかに旅寝しているような、表現しがたいほど澄み切った気持ちにさせられた。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

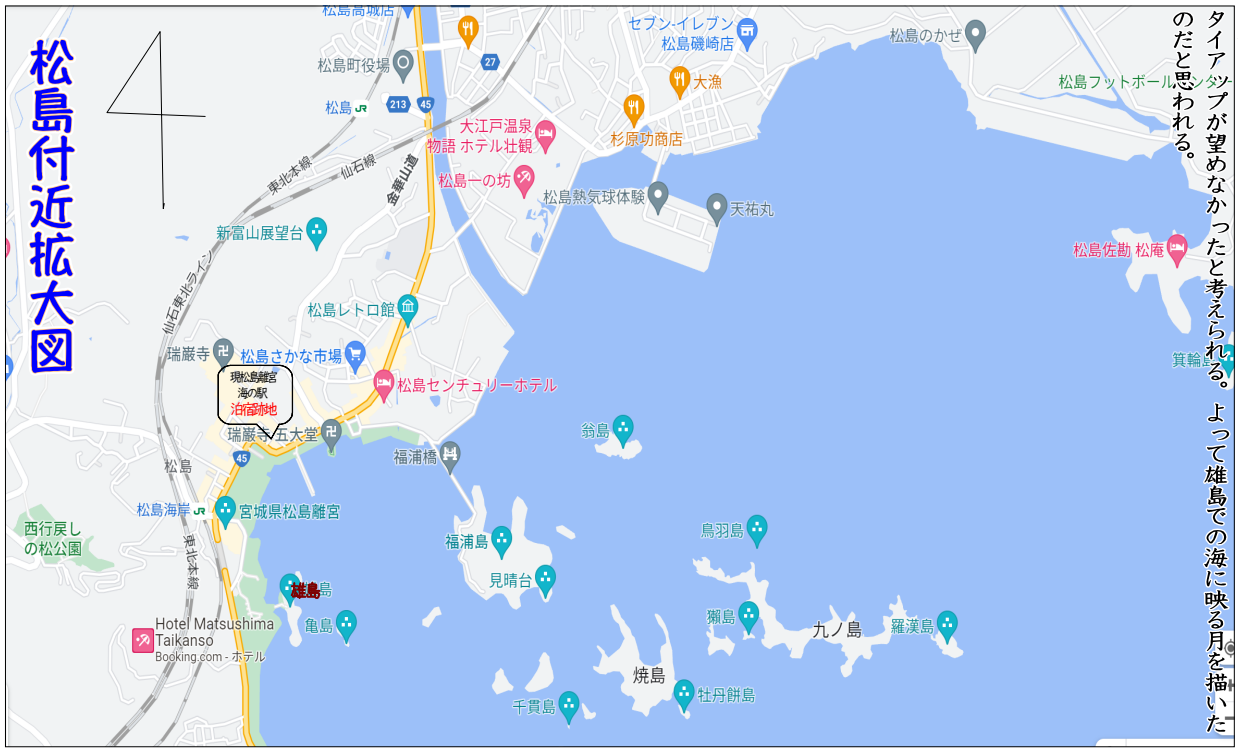
（ここ松島ではほとぎすはそのままの姿ではつりあわない。鶴の衣をまとって、優雅に見せてくれ）

（曾良は句を詠んだが）私は感激のあまり句が出てこない。眠ろうとしてもワクワクして寝られない。

深川の庵を出る時、素堂が松島の詩を、原安適が松が浦島を詠んだ和歌を餞別してくれた。それらを袋から取り出し、今夜一晩を楽しむよすがとする。

また、杉風・濁子の発句もあった。

古典A	date : 年 月 日	自然学園高等学校 梁川キャンパス
学習内容 :推察する おくのほそ道（資料）	学籍番号 氏名	



◎ここに一つの仮説を書いておきます。

・期待した以上（言われている以上）の光景が望めなかった。

期待していたのは＝「松島の月まづ心にかかりて」松島の風景と満月のコラボであったのだろう。この日は九日（九夜月）であり、満月でもなく、月が見え始めるころには、南中近く月は高くなっており、方位からみても、島々とのタイアップが望めなかったと考えられる。よって雄島での海に映る月を描いたのだと思われる。